

鳥取県女子師範学校の郷土教育における新民謡
— 《伯耆小唄》に着目して—

鈴木 慎一郎

On New Folk Song in Local Education at Tottori Girls' Normal School:
“Houki Kouta”

SUZUKI Shinichiro

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第18巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 18 / No. 3

令和4年3月25日発行 March 25, 2022

鳥取県女子師範学校の郷土教育における新民謡

- 《伯耆小唄》に着目して -

鈴木慎一郎*

On New Folk Song in Local Education at Tottori Girls' Normal School:
“Houki Kouta”

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：鳥取県女子師範学校，郷土教育，新民謡，《伯耆小唄》

Key Words: Tottori Girls' Normal School, Local Education, New Folk Song, “Houki Kouta”

はじめに

本稿の目的は、鳥取県女子師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けを明らかにすることである。

文部省は1930(昭和5)年、各師範学校に郷土研究施設費を交付し、全国の師範学校において郷土教育が展開される。各師範学校は郷土室を整備し、生徒主体の学習が開始される¹。

これまでに筆者は、2018(平成30)年、教育史学会第62回大会において、「師範学校の郷土教育における民謡の実践：鳥取県師範学校を事例として」を発表した。そこでは、鳥取県師範学校の郷土研究の方法として、『山梨県総合郷土研究』と柳田国男『郷土生活の研究法』(刀江書院、1935年)に基づいて展開されていた点を明らかにした。1939(昭和14)年、成果として発行された『郷土研究紀要 第一輯 因伯民俗調査』ならびに生徒の研究報告書には、《新民謡 貝殻節》が掲載されている点を究明し、師範学校や小学校の教員が新民謡の普及に積極的に関与していた点を指摘した。では、八頭郡八頭町に設置された、鳥取県女子師範学校においてはどうかだったのであるか。

上田誠二は、戦前・戦中の音楽を「芸術文化・学校文化・大衆文化」に分け、「学校文化」と「大衆文化」が対立する側面があったと言及する²。新民謡は「大衆文化」に該当するが、鳥取県師範学校同様に、

鳥取県女子師範学校においても積極的に取り上げられていたのだろうか。

ところで須田珠生は「校歌は、郷土教育を唱歌科で推進するなかで、「郷土の歌」(「郷土歌」)として位置づけられ、「正しき郷土人」や「よき郷土人」をつくるための教材としての役割を担うようになった」と指摘する³。そこで本稿においても校歌についても分析した後、郷土教育の実態に迫りたい。

研究方法としては第一に、鳥取県女子師範学校の沿革を概観した後、校歌ならびに寮歌の分析を行う。第二に、鳥取県女子師範学校の郷土教育における民謡の位置付けを整理する。第三に、鳥取県女子師範学校の郷土教育において紹介されていた新民謡《伯耆小唄》の分析を行う。以上の作業を通して、鳥取県女子師範学校の郷土教育における新民謡の位置付けを解明する。

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

I. 鳥取県女子師範学校

1. 鳥取県女子師範学校の沿革

表1は、鳥取県女子師範学校の沿革である。1925（大正14）年12月、鳥取県通常議会は、鳥取県女子師範学校、鳥取県立八頭高等女学校併設の件を可決する。1926（大正15）年3月、文部省告示第126号をもって設置が認可され、4月八頭郡役所跡の仮校舎にて入学式が挙行される。1927（昭和2）年、八頭郡公設グラウンド（現、鳥取県立八頭高等学校）に本館、雨天体操場が新築される。また、八頭郡賀茂村育英尋常高等小学校（現、八頭町立郡家西小学校）が代用附属小学校となる⁴。1929（昭和4）年には、寄宿舎、食堂、炊事室が新築される⁵。

なお、1931（昭和6）年には、永井郁子（1893-1983）の独唱会が開催されている（図1）。東京出身の永井郁子は1910（明治43）年、東京音楽学校予科に合格し⁶、本科声楽部を1914（大正3）年に卒業後、研究科声楽部に進学した⁷。1915（大正4）年に山田耕筈

（1886-1965）と結婚したが、翌年、離婚。東洋音楽学校（現、東京音楽大学）で教える⁸。「邦楽歌唱運動」を実行し、日本歌曲のみならず、外国歌曲も日本語の歌詞で歌っていた⁹。



図1 永井郁子女史独唱会

出典 『八頭高等学校五十年史』1975年、p.249。

表1 鳥取県女子師範学校の沿革

年	沿革	音楽教員	新民謡
1878(明治11)	島根県鳥取公立女子師範学校創立		
1881(明治14)	鳥取女子師範学校の廃止		
1882(明治15)	鳥取県公立師範学校の再置		
1891(明治24)	鳥取県尋常師範学校女子部が男子部に併置		
1908(明治41)	鳥取県師範学校第二部女子が男子部に併置		
1926(大正15)	鳥取県女子師範学校、鳥取県立八頭高等女学校認可		
1927(昭和2)		山田辰雄	《三朝小唄》
1930(昭和5)	校歌の制定		《伯耆小唄》
	文部省、郷土研究施設費を交付	林松木	
	若桜線開通		《若桜小唄》
1931(昭和6)	永井郁子女史独唱会		
1932(昭和7)	《緑ヶ丘寮歌》制定		
	郷土博物館設置		
1933(昭和8)	『郷土研究』第一輯		《新民謡 貝殻節》
1935(昭和10)	創立十周年記念行事		
1936(昭和11)	『鳥取県郷土誌』『郷土研究』第二輯		《吉岡小唄》《皆生小唄》
			《米子節》《淀江》《鳥取》
1937(昭和12)	『創立十周年記念誌』『因伯碑文集』	今井虎夫	
1940(昭和15)		鈴木義和	
1942(昭和17)			《三朝節》《倉吉小唄》
			《米子歌謡》《鳥取歌謡》
1943(昭和18)	鳥取師範学校女子部		

注 鳥取大学学芸学部音楽研究室「鳥取県における音楽教育の編成」1961年。『尚徳』1993年、pp.68-71から作成。

2. 鳥取県女子師範学校の校歌

鳥取県女子師範学校の校歌は、1930（昭和5）年に制定され、鳥取県立八頭高等女学校の校歌と同一であった（図2）。

1929（昭和4）年度の冬季休業中の宿題として、鳥取県立八頭高等女学校の生徒を含む全校生徒に、校歌の作歌の課題が課せられた。高原隆雄（国、漢、文、作）、小竹保一（国）、林ハル（国）の3名の教諭が募集主任を務め、全400編の中から20編を選んだ。続いて修身科の教諭が11編を選び、その11編は全校職員の投票により5編に絞られた。この5編は全校生徒がその中から1編ずつ投票し、高点歌2編が選ばれた。歌詞は、原田芳子（4年）を基となった¹⁰。なお、1929（昭和4）年に第二部を卒業した樋口貴美子は、上記の林ハルについて次のように回想する¹¹。

当時の寄宿舎は、郡家の郡役所跡の建物で、大きい方を本館、道を挟んで小さい方を別館と言っていた。日曜日になると、合図の鐘で本館の庭に集まり、舎監の林先生のオルガン伴奏で、カドリールダンスをやられた。そのころの林先生は四十才位ということであったが、私たちから見ると、随分年寄りに見えて、林のバアチャンと、失礼な言い方をしていたものだ。

作曲は、音楽教員の山田辰男が行う。山田は、1927

（昭和2）年3月、東京音楽学校甲種師範学校を卒業し、鳥取県女子師範学校に着任した。鈴木恵一は「東京音楽出の若き教官山田辰雄が赴任、女子教育者で音楽を指導する者が一段と多くなったことは見逃せない」と言及する¹²。歌詞は以下の通り¹³。七五調で、一番は環境、二番は修学、三番は日本女性としての覚悟が述べられている。

- 一、山は緑に 水きよく
若草もゆる 丘の上
自然の恵に 抱かれて
輝き立てる わが校舎
- 二、いとも楽しき 学舎に
常盤の松と 並び立ち
学ぶ我等の 幸よ
- 三、つゆけがれなき 白菊の
優しく強く 美しく
朝日かがやく 日の本の
み国の花と 咲き出でむ

音楽に関しては、全部で16小節からなり、前半部は4分の4拍子、後半部は4分の3拍子と、途中で拍子が変わる、珍しい校歌である。

ト長調で、最低音は一点二に対して、最高音は二点トと、非常に高い。女子生徒を対象とした校歌のため、高音が使用されていると考えられるが、男性の教職員にとっては歌にくい箇所がある。

校 歌

作曲 山田辰雄

ヤマーハ ミドリニミズキヨーク ワカクサ モーユルオーカノウエ
いとーも たのしきまなびやーに ときはの まーつとなーらびたち
ツユケガレ ナーキーシラギクーノ ヤサシク ツーヨクウーツクシク

シゼンノ メダミニイダカレ テ カガヤキ タ テルワガコウシャ
みもすこ やーかにむつまじ く まーなぶわれ らの さいわいよ
アーサヒ カガヤクヒノモト ノ ミクニノ ハ ナト サキイデム

図2 校歌

出典 『鳥取大学教育学部同窓会結成四十周年記念誌 尚徳』1993年。

3. 鳥取県女子師範学校の寮歌

寄宿舎2階建2棟、食堂、炊事室が新築され、1929（昭和4）年6月に移転した（図3、4）¹⁴。1930（昭

和5）年に第二部を卒業した青木良子は、次のように回想する¹⁵。

それまであちこちに分散していた寄宿生が、布

団を背負ったり身の回りの物を手にぶらさげて引越しをした。新しい寄宿舎に新しい食堂。新しい机に新しいお膳。みんな新しくて大喜びをしたものだ。ところが、新しいお膳の漆にかぶれた者が数多くいた。中でも大きな顔のよく太った私の顔がかぶれて腫れ上がり、見るも無残な顔であった。

1932(昭和7)年6月には、《緑ヶ丘寮歌》が制定される(図5)¹⁶。作曲は、1930(昭和5)年に着任した、群馬県出身の林松木(1897-1992)である。歌詞は以下の通り¹⁷。七五調で、一番は「霊石山」、二番は「八東川」、三番は「郡家地」、「緑ヶ丘」といった学校の周辺環境を表す語句が登場する。

- 一、八重たつ霞 わけいでて
 霊石山の 峰たかく
 あだなる風に みだれざる
 松の翠の みさをしの
 たかきが寮の 姿なり
- 二、水上遠き 八東の
 千古の流れ よどみなき
 清き白珠 まそ鏡
 むすびて磨く 光りこそ
 わが自治寮の こころなれ
- 三、さかまく潮 おしわけて
 みち一すぢに すすみゆく
 ちかひは固し 乙女われ
 ああなぐはしき 郡家地の
 緑ヶ丘の 寄宿寮

音楽に関しては、全部で25小節からなり、5段で構成されるという珍しい形式である。各段、すべてにおいて弱起で始まっているのも珍しい。

二長調。最低音は一点ハ、最高音は二点ホで、無理のない音域であり、男性の教職員でも歌うことができる。

1937(昭和12)年、今井虎夫が着任する。今井は1931(昭和6)年3月、東京音楽学校甲種師範科を卒業した。林は7年間、鳥取県女子師範学校に在職し、その間、4冊の著書を発行する(表2)。『日本の作曲家:近現代音楽人名事典』によると、林は「東京音楽学校1937年卒」と記されている¹⁸。1921(大

正10)年に東京音楽学校甲種師範科に入学したものの、1923(大正12)年に中退しており、1926(大正15)年に文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験に合格し免許を取得している¹⁹。なお、東京芸術大学の『同声会員名簿』によると、林は1937(昭和12)年、東京音楽学校の聴講生となっている。

このように鳥取県女子師範学校は、校歌の他に、《緑ヶ丘寮歌》も存在した。東京音楽学校への校歌の作成委託するのではなく、鳥取県女子師範学校の音楽の教諭によって作曲されていた。



図3 寄宿舎 食事風景 1931(昭和6)年頃
 出典 『鳥取大学教育学部同窓会結成四十周年記念誌 尚徳』1993年。



図4 寄宿舎 七夕祭 1935(昭和10)年
 出典 『鳥取大学教育学部同窓会結成四十周年記念誌 尚徳』1993年。



図5 《緑ヶ丘寮歌》

出典 『八頭高等学校五十年史』1975年, p. 126.

表2 林松木の著書

年	書名	発行	備考
1930 (昭和5)	『教授法取扱方付初等二部三部曲』	三喜堂	中野義見編, 松井力・林松木・渡邊統一
1931 (昭和6)	『昭和ピアノオルガン教本』	光成館	宮原禎次・林松木
1934 (昭和9)	『教授法取扱附初等合唱曲』上・下	音楽教育書出版協会	文部省検定済 (1932)
1935 (昭和10)	『高等小学唱歌の解説並その指導』	音楽教育書出版協会	

II. 郷土教育における民謡

1. 鳥取県女子師範学校の郷土教育

表3は、鳥取県女子師範学校における郷土教育を整理したものである。

1930 (昭和5)年, 文部省からの郷土研究施設費の交付を受け, 鳥取県女子師範学校では郷土教育が開始される。各教科において郷土研究に取り組むことになる²⁰。1932 (昭和7)年, 郷土博物館 (30坪) が設置される (図6, 8)²¹。

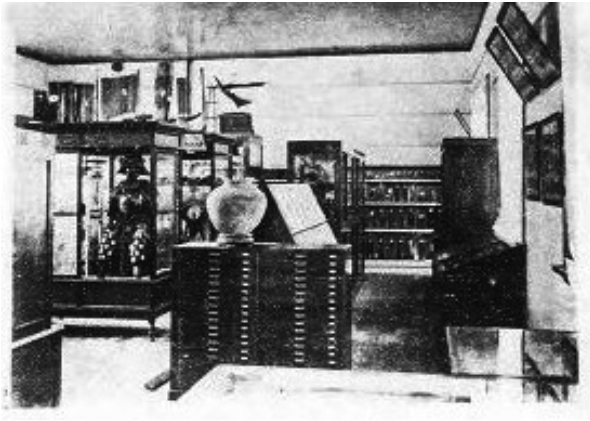


図6 郷土博物館

出典 遠部義良編『郷土研究』第一輯，鳥取県女子師範学校，1933年。

1933(昭和8)年3月、『郷土研究』第一輯が発行される。凡例に校長の川上喜一は次のように記す²²。

- 一、本書は文部省より交付せられたる郷土教育研究費に依り本校に於て研究せるもの並に資料蒐集目録を収録せるものなり
- 一、本書は第一期資料蒐集期を畢り第一次報告に止り、更に研究の結果は第二輯以下の刊行に俟つこととせり
- 一、本書は前篇後篇の二部に分れ、前篇は郷土研究の一部たる自然科学的方面、後篇は本校職員生徒共力に依り蒐集せる目録を主とし加てて研究の一端を示せり
- 一、本書は本校郷土研究主任松村太一郎教諭主として之が編纂に当りたるも、原稿整理の中道急病の爲め逝去せり、後同教諭の意思を継ぎ編輯に当りしも忽卒に際して或は遺漏正誤多からんことを窃に懼る、大方諸賢の叱正示教を祈るや切なり

郷土研究主任であった松村太一郎は、数学と理科の教諭であり、鳥取県の自然科学的方面の研究が整理された。松村は1931(昭和6)年度以降、代用附属小学校の主事も兼務し、「原稿整理の中道急病の爲め逝去」とある通り、激務であったことが推察される。

1935(昭和10)年度の「創立十周年記念事業」の際には、「記念展覧会」が10月31日から3日間、開催される²³。郷土博物館が開放された他、博物教室において、蒐集した土器や工芸品等の郷土教育資料が

展示される²⁴。

11月1日には、「記念音楽会」が開かれる。十周年記念委員作詞、林松木作曲により、《創立十周年記念祝歌》が新たにつくられ、披露される(図7)。箏・尺八合奏も発表されるが、宮城道雄(1894-1956)作曲の《小鳥の歌》²⁵と《こほろぎ》で、日本の民謡は演奏されていない。なお、課外活動の「音楽部」では、外部講師を迎えて「箏練習会」が週2回、行われていた²⁶。《創立十周年記念祝歌》の歌詞は以下の通り。《緑ヶ丘寮歌》で使用されていた「霊石山」で始まる。

- 一、 霊石山下 清ら瀬に沿ひ
松は翠の 色濃きわたり
薨並ぶる われらが学び舎
栄ゆく御代に 姿をうつし
十星霜の 歴史輝く
※努めもろとも 祝へけふの日
努めもろとも 祝へけふの日
- 二、 朝夕ひまなく 聖勅畏み
教育の道に 婦女の徳に
励みに励む ああわが使命
姉妹睦む 学びの園に
秋蘭薫る 今日の佳き日※
- 三、 久遠の光 映ゆるみ鑑
胸にかかぐる 理想は高く
大和島根の 華と咲かなむ
籬に生ふる 白菊黄菊
尽きせぬ榮譽 代々に伝へて※

音楽に関しては全部で36小節からなり、反復記号が使用されている。全番とも最後の10小節は、「努めもろとも 祝へけふの日 努めもろとも 祝へけふの日」を同一の歌詞を歌う。《緑ヶ丘寮歌》同様、各段が弱起で始まるため、4小節ではなく、5小節で構成される。ト長調、最低音が一点二、最高音が二点ホのため、無理なく歌うことができる。



図7 《創立十周年記念祝歌》

出典 『創立十周年記念誌』鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校，1937年。

1936（昭和11）年3月、『鳥取県郷土誌』（『郷土研究』第二輯）が発行される。凡例に校長の川上喜一は次のように記す²⁷。

- 一、鳥取県郷土史は、昭和八年三月本校研究にかかる『郷土研究第一輯』の続篇にして、第一輯刊行前及び其の後に於て研究せる事項の一部を『郷土研究第二輯』として刊行するものなり。第一輯には主として自然科学的方面並に本校郷土研究資料目録を収録したものなるが、本書は稍総合的研究の結果を内容とするに努めたるを以て、第一輯との重複を避くる為め自然科学的方面は略述に止め又は全く収録せざるものあり。
- 一、本書は文部省より交付せられたる郷土教育施設費の一部並に其の他の経費を以て之に充てたるも、紙数の都合等により遺憾ながら収録を割愛せる事多し。之は目下研究中の文化に属する金石文、地名、俗言、説話、迷信、地方気質、並に社会に属する郷倉、娯楽、年

中行事、特殊なる地方的研究等と共に他日刊行する計画なり。

- 一、本校に於ける郷土教育の研究は、以上如述の他、更に郷土教育資料の蒐集及び利用、先賢遺蹟の顕彰、著書、肖像の復刻、県内特殊的地方の台所、栄養、育児、保健衛生の研究、農山村に於ける婦人副業、労働服の研究、更生計画に於ける郷土教育の立場、小学校に於ける郷土教育教授細目の研究等を意図し、更に之が活用に関しては、郷土博物館の利用、講習会、講演会、座談会等の開催並に他の諸機関との連絡連携により実効を期する次第につき、関係各方面の御配慮を願う次第なり。
- 一、本書は本校教諭並に生徒の共同研究による結果を纏めたるものなり。但し学年末多忙の際収録し刊行を急ぎたるため、其の間連絡統一を欠くの憾なしとせず。此の点特に諒せらるべし。

目次は以下の通り、構成される。

第一章	生活環境
第二章	歴史
第三章	人工
第四章	産業
第五章	経済
第六章	村落と都市
第七章	行政及び財政
第八章	社会
第九章	交通
第十章	文化
第十一章	人物及び業績

「民謡」は、「第十章 文化」の中に以下の通り、位置付けられる。

第一節	神社寺院及び宗教
第二節	教育
第三節	国賓及び保護建造物
第四節	天然記念物及び名勝
第五節	方言
第六節	民芸及び玩具
第七節	民謡及び童謡

その他、1937（昭和12）年6月には、鳥取県女子師範学校編『因伯碑文集』が発行される。

表3 鳥取県女子師範学校における郷土教育

期	年	郷土研究施設費	郷土教育
第一期	1930 (昭和5)	1,810 円	1, 郷土教育に関する基本調査 2, 郷土教育振興に関する調査及協議会開催 3, 県下小学校及び中等学校に於ける郷土教育の実情調査 4, 本校郷土教育の目標確立 5, 郷土教育資料の選定蒐集
第二期	1932 (昭和7)	4,180 円	1, 郷土博物館の設置 2, 郷土博物館の利用 3, 郷土教育資料の蒐集補充 4, 職員生徒共同作業による郷土教育資料の特殊的研究 5, 本県に於ける特殊栄養の研究 (県から委託) 6, 本県に於ける学校給食の研究 7, 郷土教育資料に関する印刷物頒布 8, 郷土教育に関する講習会開催 9, 郷土教育振興に関する展覧会講演会開催 10, 鳥取県郷土史の研究 (県と連携) 11, 鳥取県郷土読本研究 (鳥取県教育会をして編纂) 12, 鳥取県教育史研究 (鳥取県教育会をして編纂) 13, 郷土に関する総合的郷土誌の編纂 『郷土研究』第一輯
第三期	1936 (昭和11)		1, 郷土の産める現存人物との連携 2, 海外に発展せる郷土人との連携 3, 研究すべき特殊山村の設定 4, 農村漁村に於ける年中行事及娯楽の研究 5, 育児に関する地方的事情の研究 6, 農村漁村婦人の生活改善に関する研究 7, 農村漁村婦人の副業に関する研究 8, 中等学校との郷土教育研究の連絡指導 9, 郷土教育経営案の研究 10, 小学校に於ける郷土教育の指導 11, 先賢の著書肖像等の復刻 12, 先賢及其の遺蹟の顕彰 『因伯碑文集』の刊行 13, 郷土教育振興に関する諸施設の提唱 『鳥取県郷土誌』(『郷土研究』第二輯) 『因伯碑文集』
	1937 (昭和12)		

注 『創立十周年記念誌』鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校, 1937年, pp. 100-105, pp. 166-169 から作成。

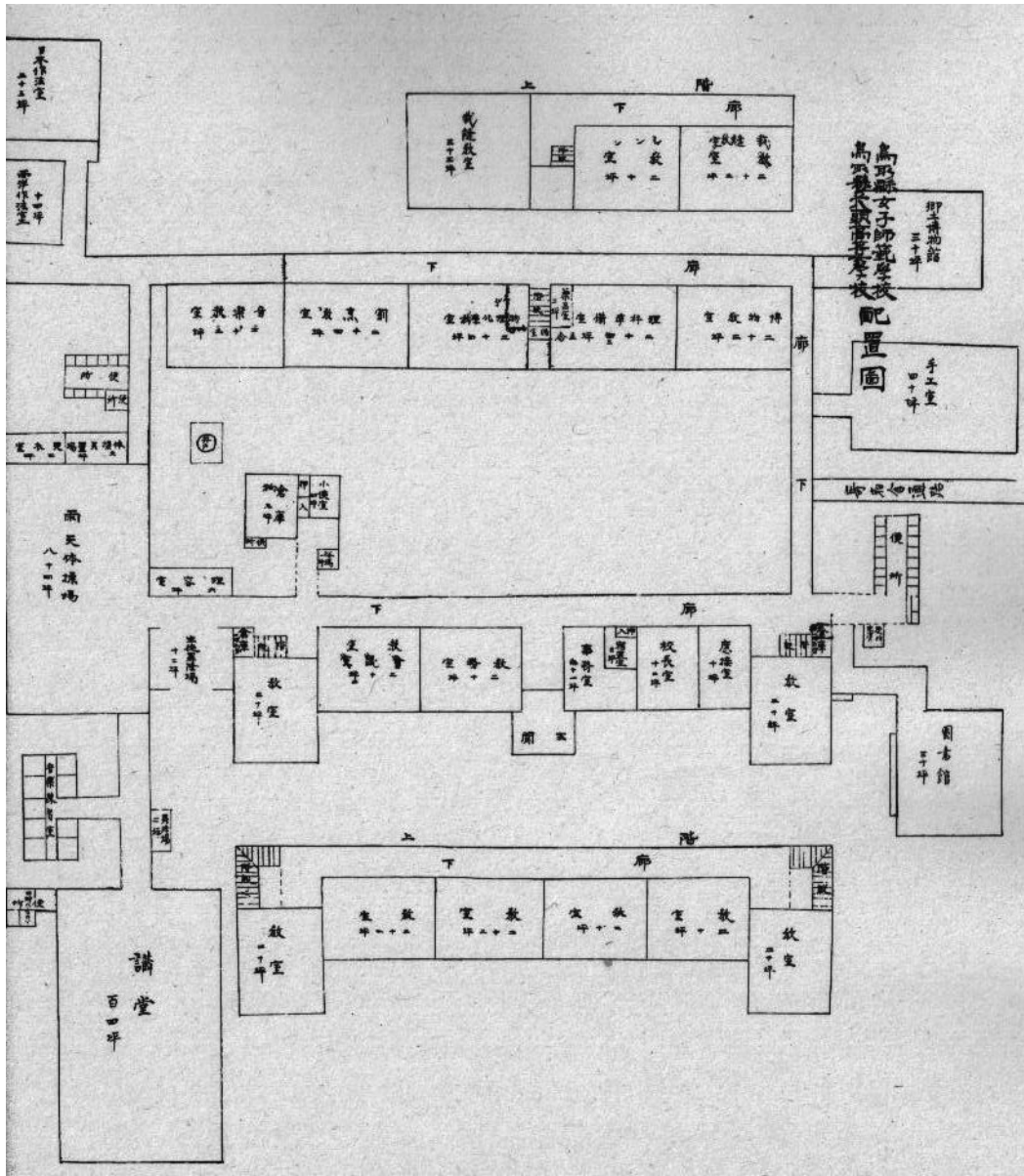


図8 鳥取県女子師範学校 配置図

出典 『八頭高等学校五十年史』1975年, p. 152。

2. 郷土教育における民謡

『鳥取県郷土誌』の「第七節 民謡及び童謡」では以下の通り、解説される²⁸。どの教科で調査されたのかは記されていない。

本県に於ける民謡・童謡・唱歌等は、大別して二つに分けて考へることが出来よう。一つは所謂純然たる民謡・童謡であつて、その歌詞・節廻しの作者が不明なばかりでなく、歌ひ出された時代さへはつきりせず、何時とはなしに、誰か

らともなく、口うつしに歌ひ伝へられ、同じ種類の歌であつても、夫を歌ふ人達の地理的状況とか、環境とか、或は人情風俗等の相異によつて、多少歌の文句も異なり、節廻しもおのづと異なつて、所謂狭い範囲ながらの、郷土固有色を多分に持つた様に変化されて居るものであり、他の一つは言はば新興民謡とも称すべきもので、近年洋楽の隆盛、或は邦楽の再認識による、邦楽と洋楽との、調和合体の意図の下に、或は時代色、世相を反影する旋律を、或はある限定された土地の紹介、広告の目的を含んで、作為的

になされた、新民謡・新小唄・音頭行進曲等の類で、何れも作歌者、作曲者のはつきりして居るものである。その他郷土より輩出した人傑を称へ歌ふ歌、或は伝説等を取扱った唱歌等がこの二つの分類の外に存在すると考へることが出来るであらう。本誌に収録したものは、前者の意味に於ける民謡・童謡であつて、後者の意味に於ける民謡、例へば、三朝小唄、若桜小唄、伯耆小唄、米子小唄、鳥取音頭、鳥取行進曲、浜村小唄等は之を除外した。(三朝小唄、伯耆小唄は参考の為に曲譜を掲載して置いた。)又唱歌といふ範囲に入るものとしては、名和長年、吉川経家、大江磐代君、大国主命、白うさぎ等があるが之も亦除外した。新作民謡・小唄・音頭の類並に唱歌の類は今後更に蒐集を進め、次期の刊行物に採録の計画である。

民謡に限定して整理すると、作詞、作曲者が不明で、伝統的な「純然たる民謡」と、作詞、作曲者のはつきりしている「新興民謡」の二つに大別している。「新興民謡」には「新民謡・新小唄・音頭行進曲等」が該当し、邦楽と洋楽の調和合体や時代色、世相を反映した旋律という特徴や土地の紹介や広告の目的であることをとらえている。

「新作民謡・小唄・音頭の類並に唱歌の類は今後更に蒐集を進め、次期の刊行物に採録の計画」と記されている通り、新民謡については掲載されていない。《三朝小唄》と《伯耆小唄》の2曲が参考までに譜例付きで紹介される(図11)。

以上から、鳥取県女子師範学校の郷土教育では、大衆文化である新民謡を拒絶せず、教材として好意的に位置付けていることが読み取れる。

「新興民謡」の一例として、《三朝小唄》、《若桜小唄》、《伯耆小唄》、《米子小唄》、《鳥取音頭》、《鳥取行進曲》、《浜村小唄》の6曲が列記される。1936(昭和11)年頃には、これらの新民謡が鳥取県において流行していたことが推察される。

中でも《若桜小唄》は鳥取県女子師範学校の地域の新民謡である。1930(昭和5)年12月、国鉄若桜線(現在、若桜鉄道)が開通する。開通の宣伝歌として、《若桜小唄》が野口雨情(1882-1945)作詞、藤井清水(1889-1944)作詞、島田豊(1900-1984)振付によってつくられる(図9)。同年11月、藤井と島田が八頭郡若桜町を訪れ、西方寺において講習会も開催され、200人程が参加した²⁹。翌年の1931(昭和6)年8月には、ビクターから、葭町勝太郎(1904-1974)が唄うSPレコードが発売されるまで

に至る。歌詞は以下の通り³⁰。

- 一、因州若桜に ソレ桜が咲いて
咲いた桜に トコセ、アラヨー
春の鳥だね チョイト来てとまる
- 二、永い月日を ソレ待てとは無理よ
若桜弁天 トコセ、アラヨー
かうなるからはね チョイト縁たのむ
- 三、泥にや棲まない ソレ若桜の鯉は
意気ぢやないかい トコセ、アラヨー
水にせかれて チョイト川に棲む
- 四、いつの間にやら ソレ若桜の杉は
枯れた枝さへ トコセ、アラヨー
移り香までも チョイト桜色
- 五、山の中でも ソレ若桜は都
若桜都で トコセ、アラヨー
花は二度咲く チョイト三度咲く

なお、裏面には、石川県小松市の粟津温泉を題材とした、野口雨情作詞、藤井清水作曲の《粟津小唄》が録音され、梅若(1906-1992)が唄う。東によると、1930(昭和5)年4月に、野口と藤井は、石川県を訪れ、粟津温泉の法師旅館(現在、法師)に宿泊し、創作した³¹。



図9 《若桜小唄》
出典 『鳥取新報』1930年11月5日。

「第七節 民謡及び童謡」は、下記の通り構成される。

- 一、童謡
 - (1) 手毬歌
 - (2) 羽子突歌
 - (3) 縄飛歌
 - (4) お手玉歌
 - (5) 子守歌
 - (6) 雑
- 二、娯楽歌
 - (1) 盆踊歌
 - (2) 獅子舞歌
- 三、祝限歌
- 四、作業歌
 - (1) 田植歌
 - (2) 田草取歌
 - (3) 豊年歌(稲刈歌)
 - (4) 臼挽歌
 - (5) 唐臼踏歌
 - (6) 地搗歌
 - (7) 糸引歌
 - (8) 油絞歌
 - (9) 木挽歌
 - (10) 味噌搗歌
 - (11) 麦打歌
 - (12) 牛換歌
 - (13) 牛追歌(追掛)
 - (14) 簗漕歌
- 五、雑謡

上記の「四、作業歌」の中に「(14)簗漕歌」が含まれ、下記が掲載される³²。

- 何の因果で貝殻引になつた、肩も腕もみなめげた(東伯郡地方)
- 泊沖から貝が招く、かゝやまゝたけ出にやならぬ(東伯郡地方)

これらは《貝殻節》で2曲とも東伯郡地方であり、泊の《貝殻節》も所収される。1933(昭和8)年1月にコロムビアから《新民謡 貝殻節》のSPレコードが発売された。前述の引用には「浜村小唄等は之を除外した」とある。B面の《新民謡 貝殻節》の裏側のA面に《浜村小唄》が録音されていたため、新民謡である《新民謡 貝殻節》の歌詞も掲載されていない。

前述の通り、参考のために《三朝小唄》と《伯耆小唄》の譜例が掲載されている(図11)。2曲とも、中山晋平(1887-1952)が作曲した、鳥取県の新民謡である。中山が作曲した鳥取県の新民謡はこの2曲のみであった。

中山晋平は、1887(明治20)年、長野県中野市にて誕生。1897(明治30)年、日野尋常小学校(現、中野市立日野小学校)、1902(明治35)年、下高井高等小学校(現、中野市立中野小学校)を卒業。1903(明治36)年、小学校の准教員養成のための長野県師範学校講習科第三種を受講し、准教員の免許を受け、代用教員となった。1908(明治41)年、東京音楽学校予科に入学、1912(明治45)年、東京音楽学校本科器楽部(ピアノ)を卒業し、千束尋常小学校(現、台東区立千束小学校)の音楽専科訓導となる。1914(大正3)年、《カチューシャの唄》を作曲し、大流行する。1919(大正8)年、日本蓄音器商会の森垣二郎は、中山晋平と野口雨情を誘い、水戸、大洗、郡山、湯本を旅した。1922(大正11)年、千束尋常小学校を退職³³。

《三朝小唄》は、1927(昭和2)年8月、成徳尋常高等小学校(現、倉吉市立成徳小学校)で開催された「夏季音楽講習会」において発表された、鳥取県最初の新民謡である。作詞は野口雨情、作曲は中山晋平、振付は島田豊によってなされた。講師として、野口、中山、島田に加え、歌手の佐藤千夜子(1897-1968)、音楽教育および実地指導の杉江秀(1881-1943)らが招かれた³⁴。1929(昭和4)年4月、ビクターからSPレコード(50686)が発売され、葭町二三吉(藤本二三吉、1897-1976)が唄い、ヒットする。また、同年、無声映画『三朝小唄』が製作される。《三朝小唄》に関しては、『三朝町誌』(1965)³⁵、『三朝温泉誌』(1983)³⁶、大西秀紀(2002)³⁷、富田美香(2002、2006)³⁸によって調査が進んでいるため、本稿では《伯耆小唄》を対象とする。

Ⅲ. 《伯耆小唄》

1. 作成の経緯

昭和初年、山陰音楽連盟が、山陰各地の小唄を作成する運動を起し、大阪毎日新聞社がこれに後援し、懸賞募集を行う。その結果、鳥取県米子市では、都田鼎が作詞した《伯耆小唄》が入選となる。この歌詞に中山晋平によって曲がつけられる。

新作発表会が米子市にあった芝居小屋の朝日座で、1929(昭和4)年11月に開催される。その様子につ

いて、『米子市三十周年史』(1959)において以下のように記される³⁹。

それまで米子市では公開音楽会が行われたことがなく、その開会も随分危ぶまれていたが、地元の宣伝よろしきを得たのか、幕をあげてみると、二階ともあふれるような人波に中山氏も驚いた。そこでこの入場者を音楽的雰囲気を持って行く手段として、先ず一同に呼びかけて、自作の童謡を繰り返し合唱させ、すっかり盛り上がったところに《伯耆小唄》を発表し、唱い、唱わせて楽しい音楽会となった。この時はまた踊りも公開するため、藤懸静枝さんが、明月楼のきれい処数人に振付けしていたが、当日となって俄かに「家元のお師匠の許可をうけねば」と異議を申し立てられ、結局三味線の伴奏を応援した程度におわった。

1930(昭和5)年6月、ビクターから《伯耆小唄》のSPレコード(51172)が発売され、二三吉が唄う。歌詞に関しては、都田鼎作詞、野口雨情が補作として記される。

二三吉は、1897(明治30)年、東京で生まれ、1909(明治42)年、「はん子」の名で半玉として浅草の花街に入り、1915(大正4)年、「葭町二三吉」と改め、日本橋葭町の芸者となる。1924(大正13)年、富士山レコードから《復興節》でレコードデビューする。1928(昭和3)年、ビクターの設立とともに専属契約を結び、《春雨》、《香に迷う》の端唄を出す(50257)。1929(昭和4)年4月発売の《三朝小唄》、同年7月発売の時雨音羽根(1899-1980)作詞、佐々紅華(1886-1961)作曲《浪波小唄》(50793)が大ヒットする。1930(昭和5)年から「二三吉」とかわり、1931(昭和6)年頃から「藤本二三吉」となる。1933(昭和8)年、コロムビアに移る⁴⁰。

《伯耆小唄》の表面には《石見小唄》(別名《三瓶お山》)が録音され、佐藤千夜子が唄う。《石見小唄》も山陰音楽連盟が公募した歌詞で、長谷修作詞、野口雨情補作である。中山晋平が作曲し、島根県浜田市にあった島根県女子師範学校において、1929(昭和4)年11月に発表される。

佐藤千夜子は、1897(明治30)年、山形県で生まれ、1911(明治44)年、上京し、普連土女学校(現、普連土学園中学校・高等学校)に入学する。1913(大正2)年、2年終了後、青山女学院普通部普通科3年に編入し、1916(大正5)年、卒業する。私立女子音楽学校(1927年、日本音楽学校、現在、有明教

育芸術短期大学)にて受験準備をし、1920(大正9)年、東京音楽学校予科に入学するものの、1921(大正10)年、退学。本郷中央会堂(現在、本郷中央教会)の聖歌隊に入る。パイプオルガンがあり、岡野貞一(1878-1941)が演奏していた(1923年の関東大震災で焼失)。聖歌隊の発表会において佐藤千夜子は独唱を務め、山田耕筰(1886-1965)と中山晋平が聴きにきており、中山晋平は山田耕筰により佐藤千夜子を紹介される⁴¹。

同様に《雲州小唄》(別名《出雲曇り日》)も山陰音楽連盟公募で佐伯盛美作詞、野口雨情補作、中山晋平作曲である。1929(昭和4)年11月、島根県松江市の出雲劇場で発表され、1930(昭和5)年6月にビクターからSPレコード(51171)が発売され、二三吉と佐藤千夜子が唄う。

渡辺裕は「同じレコードの表裏に同じ「新曲」の二つのヴァージョンをカップリングしているケースがかなり多い」と指摘し、「二三吉は三味線に若干の洋楽器が加わった「モダン芸妓」の端唄スタイルのヴァージョンを受け持ち、裏面には二村定一、佐藤千夜子らの洋楽系の歌手がオーケストラ伴奏で唄ったものが収録されていた」と分析する⁴²。この時期のビクターのレコードは、佐藤千夜子と二三吉の二頭仕立てが特徴であった。最初の二頭仕立ては、1929(昭和4)年8月に発売された、野口雨情作詞、中山晋平作曲、藤間静江振付の新潟市の新民謡である《港おどり》であった。

なお、1933(昭和8)年、春秋社から発行された、町田嘉章編『世界音楽全集』第43巻 日本新民謡曲集には《雲州小唄》が所収されている。以下は歌詞である⁴³。

- 一、ハアー
出雲ナー曇り日
風が吹きや晴れるヤソレセ
おやまおろしがエ
おやまおろしが吹きや晴れる
※ハ ヨイシヨ ヨイシヨ ヨイシヨ
コリヤサ
- 二、ハアー恵比須ナー大黒
出雲ハ日和ヤソレセ
踊を駒下駄エ
踊る駒下駄からころり ※
- 三、ハアー
出雲ナー曇り日
風が吹きや晴れるヤソレセ
おやまおろしが吹きや晴れる ※

四、ハアー

斐伊のナーソレセ
 おろちや居らぬにエ
 おろちや要らぬになぜ曇る ※

2. 歌詞

都田鼎作詞の《伯耆小唄》の歌詞は、以下の通りである⁴⁴。SPレコードでは、4番まで録音されている。「大山」、「砂丘」、「日野川」、「米子中海」といった鳥取県西部の周辺環境を表す語句が使用されている。

- 一、空が雲つた大山さまよ
 トモ ソウトモ ソウトモナ
 五里の砂丘エ
 ショコ ホイサカ ホイホイノ
 松ばかり
- 二、お山くもれば浜まで曇る
 なぜか私のエ
 心まで
- 三、関のはなからふく汐風に
 こぼれ松葉がエ
 ほろほると
- 四、雨ははらはら日野川よもぎ
 音もたてねばエ
 名も立たず
- 五、米子中海夕焼小焼
 船出しましょかエ あいの風
- 六、あいの風なら帆もまきあげよが
 恋の風ならエ
 とまりましょ

3. 音楽

中山晋平は流行歌の作曲において、図 10 に示した通り、「(A) 短旋法、(B) 学童旋法、(C) 田舎節系民謡音階、(D) 都節系民謡音階」を用いると言及する。これらに基づくと、《伯耆小唄》は、二音を主音とする「田舎節系民謡音階」に該当する。中山は

「田舎節系民謡音階」のことを「日本従来の郷土民謡といへば、この音階が大部分を占めております」と述べる⁴⁵。

A. 短旋法

例 “浅草の唄”, “波浮の港” 等

B. 学童旋法

(イ). 長音階学童旋法

例 “紅屋の娘”, “ゴンドラの唄”, “雨降りお月さん”, “螢の夢” 等

(ロ). 短音階学童旋法

例. “東京音頭”, “東京行進曲”, “銀座の柳” 等

C. 田舎節系民謡音階

例. “出船の港”, “青い芒”.

D. 都節系民謡音階

例. “鴨川小唄”, “唐人お吉”.

図 10 中山晋平の流行歌の音階

出典 中山晋平「流行歌の作曲」北原鉄雄編『アルス音楽大講座第4巻作曲の実際』アルス、1936年、pp.178-179。



図 11 《伯耆小唄》

出典 田中友一編『鳥取県郷土史』郷土研究第二輯，鳥取県女子師範学校，1936年，p.429。

おわりに

その後，《伯耆小唄》の旋律に，米子市を主題とした歌詞が都田鼎によって作詞され，《米子小唄》と再構成される。さらに1929（昭和4）年，地元の門脇陽一郎の原作に基づき，葛原しげる（1886-1961）に作詞，小松耕輔（1884-1966）・宮城道雄（1894-1956）に作曲が依頼され，新たな《米子小唄》となる⁴⁶。

1936（昭和11）年，米子の知名度を高めるために市民歌の制定が企画され，一般に歌詞を募集し，野口雨情が補筆し，《米子節》がつくられる。1936（昭和12）年には，渡辺政善作詞，小原弘作曲により，《市制十周年祝賀行進曲》がつくられる。

戦後の1950（昭和25）年，一般から歌詞を募集し，国頭千枝子が選ばれ，服部正（1908-2008）により作曲され，《米子小唄》がつくられる。

このように《伯耆小唄》は中山晋平により1929（昭和4）年に作曲され，1930（昭和5）年にビクターからSPレコードが発売されるものの，《米子小唄》と再構成され，《伯耆小唄》は非常に短命となり，歌い継がれることはなかった。その要因としては，曲名に「米子」という地名が含まれていなかったことであったことが考えられる。

『鳥取県郷土誌』において「新作民謡・小唄・音頭の類並に唱歌の類は今後更に蒐集を進め，次期の刊行物に採録の計画である」と記されていたものの，次期の刊行物は発行されなかった⁴⁷。そのため，どのような新民謡を蒐集していたかについて追究することができなかった。とはいえ，鳥取県女子師範学校の郷土教育では，大衆文化である新民謡を拒絶せず，教材として好意的に位置付けていたことは明らかである。

ところで，文部省は1935（昭和10）年，山梨県を指定して，山梨県師範学校・山梨県女子師範学校に『山梨県総合郷土研究』の編纂を行うように示唆した。続いて1936（昭和11）年には秋田県，茨城県，香川県を指定して各師範学校に『総合郷土研究』の編纂を企画した。今後はこれらの県についても対象に広げ，新民謡の実態について究明していきたい。

付記

本研究は、JSPS 科研費 21K02465 (基盤研究C「戦前の新民謡運動を契機とした師範学校における郷土教育の展開と戦後への波及」)の助成を受けたものである。

本稿は、教育史学会第65回大会(2021年)において口頭発表した内容を発展させたものである。

注

- 1 伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版, 2008年, pp.95-169。
- 2 上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか：教育と音楽の大衆社会史』新曜社, 2010年, p.27。
- 3 須田珠生『校歌の誕生』人文書院, 2020年, pp.146-147。
- 4 遠部義良編『創立十周年記念誌』鳥取県女子師範学校・鳥取県立八頭高等女学校, 1937年, pp.74-75, pp.110-116。
- 5 米澤守雄編『鳥取大学教育学部同窓会結成四十周年記念誌 尚徳』鳥取大学教育学部同窓会, 1993年, pp.69-70。
- 6 「永井いく」と掲載。
『東京音楽学校一覧 従明治四十三年至明治四十四年』東京音楽学校, 1910年, p.99。
- 7 『東京音楽学校一覧 従大正四年至大正五年』東京音楽学校, 1915年, p.105。
- 8 武石みどり監修, 東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会編『音楽教育の礎：鈴木米次郎と東洋音楽学校』春秋社, 2007年。
- 9 1932(昭和7)年頃, 福岡県立門司高等女学校(福岡県立門司北高等学校, 2009年閉校)においても「永井郁子女史独唱会」が行われた。
畑中良輔『日本歌曲をめぐる人々』音楽之友社, 2013年, pp.5-9。
- 10 八頭高等学校五十年史編纂委員会『八頭高等学校五十年史』鳥取県立八頭高等学校, 1975年, p.200。
- 11 樋口喜美子「母校の思い出と同窓会」米澤守雄編『鳥取大学教育学部同窓会結成四十周年記念誌 尚徳』鳥取大学教育学部同窓会, 1993年, p.77。
- 12 鈴木恵一『鳥取楽壇の歩み』1982年, p.46。
- 13 米澤, 前掲書。
- 14 同書, p.70。
- 15 青木良子「写真の集い」米澤守雄編『鳥取大学教育学部同窓会結成四十周年記念誌 尚徳』鳥取大学教育学部同窓会, 1993年, p.80。
- 16 米澤, 前掲書, p.71。
- 17 八頭, 前掲書, p.126。
- 18 細川周平・片山杜秀監修『日本の作曲家：近代現代音楽人名事典』日外アソシエーツ, 2008年, p.537。
- 19 鳥取大学学芸学部音楽研究室「鳥取県における音楽教育の変遷」鳥取大学, 1961年, 別表1。
- 20 岩上行忍「鳥取県における音楽教育の変遷：主として鳥取師範学校および鳥取大学の音楽科教員と卒業生について」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』第12巻第2号, 鳥取大学, 1970年, p.59。
坂本麻実子「大正音楽教育界における文検出身教員の軌跡」『桐朋学園大学研究紀要』36巻, 桐朋学園大学, 2010年, p.109。
『東京音楽学校一覧 従大正十年至大正十一年』東京音楽学校, 1921年, p.74。
「我が国の作曲家シリーズ002「林松木」名大作曲同好会(2021年8月2日閲覧)
我が国の作曲家シリーズ002「林松木」-名大作曲同好会(hateblo.jp)
- 21 遠部, 前掲書, p.167。
- 22 八頭, 前掲書, p.151。
- 23 遠部義良編『郷土研究』第一輯, 鳥取県女子師範学校, 1933年, 凡例。
- 24 遠部, 前掲書, p.29。
- 25 同書, p.37, p.42。
- 26 ビクターからSPレコード発売(50366)。B面には, 宮城道雄作曲《谷間の水車》。
- 27 同書, pp.44-46。
- 28 田中友一編『鳥取県郷土誌』郷土研究第二輯, 鳥取県女子師範学校, 1936年, 凡例。
- 29 同書, p.431。
- 30 東道人『野口雨情 詩と民謡の旅』踏青社, 1995年, pp.111-112。
- 31 鳥取県若桜町編『若桜町誌』中央印刷, 1982年, pp.724-725。
- 32 東, 前掲書, pp.466-468。
- 33 田中, 前掲書, p.445。
- 34 中山卯郎『中山晋平作曲目録・年譜』芸術現代社, 1980年, pp.287-317。
- 35 伊佐田甚蔵「私の思い出から」三朝温泉誌編集委員会編『三朝温泉誌』鳥取県三朝町, 1983年, p.432。
- 36 三朝町役場総務課編『三朝町誌』三朝町役場, 1965年, pp.595-597。
- 37 三朝町史編さん委員会編『新修三朝町史』三朝町, 2009年, pp.536-537。
- 38 大西秀紀「流行歌《三朝小唄》について」『立命館大学アトリサーチセンター紀要』vol.02, 2002年, pp.101-104。
- 39 富田美香「「場」への回帰：『三朝小唄』という

-
- 装置』『立命館大学アトリサーチセンター紀要』vol.02, 2002年, pp.105-113。
富田美香・大坪秀夫「マキノ映画『三朝小唄』(1929年)復元調査報告』『立命館大学アトリサーチセンター紀要』vol.06, 2006年, pp.123-135。
- 39 米子市役所編『米子市三十周年史』米子市役所, 1959年, p.485。
- 40 森田哲至「新民謡運動と鶯芸者による「日本歌謡」の成立と発展：日本橋葭町等の芸者たちが遺した日本音楽上の意義』『日本橋研究』4(1), 日本橋学館大学, 2011年, pp.11-17。
渡辺裕『日本文化 モダン・ラブソディ』春秋社, 2002年, pp.108-122。
- 41 菊池清磨『近代日本流行歌の父 中山晋平』郷土出版社, 2007年, pp.127-132。
結城亮一『あゝ東京行進曲』河出書房新社, 1976年。
- 42 渡辺, 前掲書, p.113。
- 43 町田嘉章編『世界音楽全集』第43巻 日本新民謡曲集, 春秋社, 1933年, p.252。
- 44 米子, 前掲書, pp.484-485。
- 45 中山晋平「流行歌の作曲」北原鉄雄編『アルス音楽大講座第4巻作曲の実際』アルス, 1936年, p.179。
- 46 町田, 前掲書, pp.485-487。
- 47 田中, 前掲書, p.431。